

特集 第6回『言語力』大賞コンテスト

今年で6回目を迎えた本コンテスト。

昨年度は第5回までの受賞作をまとめた作品集『幻灯夢』が、弘前大学出版会から刊行されました。今年も応募作品の中から下記の優秀作品が選ばれました。

第6回弘前大学学生『言語力』大賞コンテスト 受賞者一覧

I：文学作品部門（ジャンルは自由）		*応募総数20点	
大賞	人文学部2年 山内 梢	「光の汀」	
優秀賞	医学部保健学科3年 梅田 大峰	「エモーショナル・エモーション」	
〃	人文学部1年 石川 里穂	「John Smith & Company!!」	
佳作	人文学部3年 榎谷 智美	「伝言板ネットワーク」	
〃	人文学部1年 葛西 鈴香	「悪夢の果てに」	
II：評論部門（テーマ「21世紀における地域の発展に向けて」）		*応募総数1点	
佳作	教育学部3年 佐藤 雄哉	「ケータイと生きる」	

★受賞作品公開★<http://www.ul.hirosaki-u.ac.jp/guidetop/gengoryoku/index.html>

大賞受賞者の声

挑戦の場

第6回言語力大賞 大賞受賞 人文学部2年 山内 梢



私は昔から色々なことを空想して遊ぶことが好きでした。自分ではない別の誰かが、別の世界で冒険を繰り広げる——そんな空想を、目に見える形で現実に留めておきたい。そう思った時、私が選んだのは「小説」という方法でした。ひとりでこつこつと書いては消し、書いては投げ出しを繰り返していたものが、次第に友達に見せるようになり、「読まれる」ことを意識して書くようになりました。そして、もっと自分の書いた物語を色々な人に読んでもらいたい、感想を聞きたいと思うようになったのです。そんな折、私は『言語力』大賞コンテストを知りました。長編を書くには力量が足りず、他の文学賞に応募する勇気もなく……という私でしたが、大学内のコンテストで、

しかも4000字程度の短編ならば、自分でも書けるかもしれない、力量を試せるかもしれない——により、自分の物語に対して客観的な意見を聞くことができるとあらば、応募しない理由はありませんでした。

飽き性な私でも、短編ならばきちんと書き切れるだろう。初めはそう思っていました。しかし、いざ書き始めてみると、短編小説だからこそその制約が立ちちはだかり、執筆はなかなかかどりませんでした。まず、短い枚数の中で物語を完結させなければならないため、込み入った設定や展開はできません。また、登場人物が多いと、短い枚数では書き分けが難しく、一人一人が薄っぺらい印象になってしまいますから、登場人物を一人や二

人、多くても三人か四人に限定しなくてはなりません。文章も、短編だからこそその読みやすさを前提としたものでなければならぬ——など、短編の難しさを痛感しました。そして悪戦苦闘の結果、完成したのが、受賞作「光の汀」です。この作品では、四季というサイクルで物語を区切り、登場人物を二人に限定。また、文章も長々と書き連ねるのではなく、なるべく一文を短く、「簡潔な表現で鮮やかな印象」を心掛けました。作品の舞台、恐山・宇曽利湖の雰囲気や情景が上手く伝わっていれば嬉しいです。

書き上げてみてわかりましたが、短いから書き

やすい、ではなく、むしろ短いからこそ難しいのではないかと思います。それが「言語力」大賞の難しさではないか、とも。裏を返せば、難しいからこそ自分の実力が素直にわかる、ということではありますが、より幅広い学部、学生から作品を募るのであれば、「〇〇字程度」や「〇枚まで」ではなく、「〇枚以上」など下限だけ設定し、上限は設けない方針も検討するべきではないでしょうか。

私にとって「言語力」大賞は挑戦の場でした。今後も、多くの弘大生にとって「言語力」大賞がなにかひとつの目標となるような、そんなコンテストで在り続けることを願っています。

(やまうち こそえ)

審査委員から

「言語力大賞コンテスト」考

第6回言語力大賞審査委員 理工学部准教授 小西 榮一

本学の図書館主催の「言語力コンテスト」(第6回)の今年度の審査委員の末席に連なった。10月半ば過ぎに審査を終え、無事に「お役御免」と心づもりしていたら、さらに作文を義務付けられた。「言語力コンテスト」の将来に何かお役に立てればと思い、拙文をお届けする。

簡条書きとする。(1)文学作品部門の水準は高いと思う。入選作は構成もしっかりしているし、文章も悪くない。また応募数もそれなりにある。しかし(2)文学作品部門以外の関心は極めて低い。応募数も極めて少ない。また文学作品部門の応募

者の学部も人文系がほとんどであり、理工系はまれである。さらに(3)審査員の問題。審査員は毎年入れ替わりが多い。私のように、常日ごろ減点法でレポート採点をしている者にとっては、標準以上の作品の優劣を見極めるのは困難であったと思う。「審査力」のある常任の審査員を若干人置いてはどうだろうか。

審査員の構成はともかく、やはり、多くの学生が参加する斬新な企画が必要であろう。それには企画の段階で学生にアイデアを募集してみたいかがであろう。暴論であろうか？

(こにし えいいち)

「言語力」大賞コンテストの審査を終えて

第6回言語力大賞審査委員 農学生命科学部准教授 石田 清



言語力大賞コンテストへの応募作は、文学作品部門で20件、評論部門で1件ありましたが、私が惹かれた作品は4作ありました。そのうちのひとつが大賞受賞作「光の汀」です。今夏霊場恐山を歩く機会があったのですが、この作品を読んであの霊場の幻想的な雰囲気が脳裏に蘇ってきました。

私には、作中の「私」と「若い男の人」は脇役で、霊場そのものが主人公であるかのように感じられた作品です。

ところで、私はここ十数年、純文学と言われるような作品を読んでいません。余暇の楽しみとして読書することはありますが、そういう時に読む

のはエッセイやノンフィクションばかりです。「事実は小説よりも奇なり」と考える私のような人間が文学作品の審査に加わるのは如何なものかと思うこともありました。審査の視点の「多様性」を高めることにも意味があると思ひ直し、審査を引き受けた次第です。それにしても、言語力大賞コンテストの文学作品部門は、ジャンルは自由な

のに、応募作は小説ばかりで随想や紀行文、ノンフィクションがなかったことが気になります。評論部門の応募作が1件しかなかったことも、根は同じかもしれません。弘大生の「言語力」を高めていくためには、こうした様々なジャンルの応募作品を増やす工夫が必要かもしれません。

(いしだ きよし)

第6回「言語力」大賞コンテスト 審査員をつとめて

第6回言語力大賞審査委員 医学研究科准教授 相澤 寛



今回初めて審査員をつとめました。文学の素養のない私なりに、筋や人物像の一貫性とまとまり、または、文が荒削りでも内容展開に惹かれるものがあるか、に重心を置き、美文や読者の感情移入に期待依存していると感じさせる詠嘆調のものには距離をおきました。文学作品部門は上位候補選考に悩まされ、ゼロからの創作でこれほどのものがと感心しました。授賞式後お話を聞き、日頃から仲間うちでの創作、批評に慣れ、一定の方向性で文を綴って過ごしている学生さんがいらっしやるのだと認識しました。一方で、評論部門への応募が少ないことは大変残念です。ゼミやレポートで論述に疲れているのか、巷にあふれる

新聞雑誌の社説、ネット上の議論、つぶやきを前に遠慮してか、大学という社会の中で自分の名前でも評論を出すことに躊躇してのことか、考えさせられました。文学作品部門は活発でしたが、書き手ないし登場人物が社会・集団にあって生活していく中で何かを感じて考え、整理し、伝える場面は少なかったと思います。他の世代や立場とは異なる、学生さんならではの視点、主張が出てきやすそうなテーマを加えとか、各学部で評論部門のテーマに関連する内容を扱うゼミや講義に協力をお願いして学生に評論を書かせ、選抜した作品を応募作品として審査するなどの、評論部門でのこ入れの工夫と今後の発展に期待しています。

(あいざわ ひろし)

受賞作の衆目の評価を、 そして若き文芸者の登竜門に

第6回言語力大賞審査委員 保健学研究科准教授 大友 良光



芸術であれ、技術であれ、一度プロの評価を得た作品の創造者は時代の寵児となり、その人生が一変し、その作品に触れる者の生活に強いインパクトを与えます。

『言語力』大賞コンテストは今年6回目を迎え11月5日に受賞式が行われました。受賞者の喜びはいかばかりかと思われ。しかし、渾身の力作が多くの学生に読まれる機会はどれほどあるのでしょうか、残念ながら知る由もありません。このことは審査員にとっても重大な問題となりま

す。選ばれた作品が多数の読者に支持されることは審査員に対する評価でもあるからです。したがって、受賞作品が多くの読者の目に留る工夫が急務と思います。最近になって漸く、第5回までの作品群が弘前大学出版会から出版されるようになり、一歩前進したと思われ。しかし、公表の迅速性には欠けております。

受賞作を号外などで学内外に紙媒体で提供することも一考ではないでしょうか。受賞作が紙媒体で直ちに学内や書店等に並ぶことになれば、受賞

者にとっては褒賞品にも勝る名誉になるだけでなく、衆目の評価は選者の力量も問うことにもなり、本コンテストの継続的發展に繋がるものと思われま

願わくは、太宰治を輩出した弘前大学の本コンテストが全国の大学生等に周知され、時代を先導する若き文芸者の登竜門になることを望みたいと思います。

(おおとも よしみつ)

本との出会いを楽しむ 第6回

美とファンタジーの世界へ

保健学研究科教授 西澤 一治



原稿を依頼されて改めて自分の書棚を眺めると、医学の専門書よりも美術と音楽関連の本が多いのに気づきました。購入してまだ読み終えていない本も数多くあります。この中でご紹介するとすれば、エウヘーニオ・ドールス著「プラド美術館の三時間 Tres Horas En El Museo Del Prado」(神吉敬三訳、美術出版社 1973) でしょう。この初版本は上質な布地装丁で、外装は原著の第 10



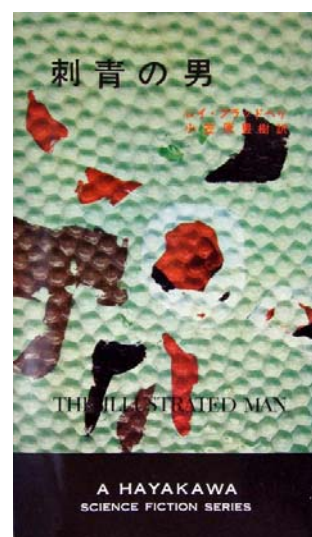
版(1971)を忠実に模したものと思われる。これは決してプラドのガイドブック的な本ではなく、いわば美術評論に属します。エル・グレコ、ゴヤ、ベラスケスに多くの頁を割いていますが、この本

を味わいますと、いつかはプラドを訪れたいと願わずには居られない気持ちになります。

残念ながら本書は絶版で、97年に筑摩書房から新装版で発行されているのですが、これも絶版になっているようです。

子供の頃、生家の2軒隣に「暖鳥」の小さな看板が掲げられた貸本屋がありました。高校の教師をされていたご主人は有名なアララギ派の歌人でした。店を切り盛りなさっていた奥様が、今思えば相当な知識人で、本好きの私に「これを読んでご覧なさい」、「今度はこれを」と、色々なジャン

ルの本を薦めてくれました。ここで出会ってファンになったのがペーパーバックの早川ミステリとSFであります。クリスティ、ドイル、クイーンなどの推理小説、アシモフ、ハインラインなどのSFは有名な作品は学生時代に殆ど読みました。チャンドラーなどのハードボイルドにも夢中になりました。特にSFの魅力に惹かれて知った作家が、「華氏451度 Fahrenheit 451」で知られるレイ・ブラッドベリ Ray Bradbury であります。彼はその後SFから離れてファンタジーに軸を移しますが、「火星年代記 The Martian Chronicles」のような抒情詩的な名作は、年代を超えて輝き続けるSFの金字塔と思います。ブラッドベリは多くの短編集を上梓して、私は2作目の「刺青の男 The Illustrated Man」が大好きです。特にこの中の「万華鏡 Kaleidoscope」や「今夜限り世界が The Last Night of the World」は、読んだ後に何か心に深くしみ入って忘れられないものがあります。冬の夜にグラスを片手にお読みになっては如何でしょうか。



(にしざわ かずはる)